

キラリびと

「おおいた、つくりびと」で活躍する学生、
教職員、地域の皆さんにインタビュー。

15



工学部 建築学科2年

中西 涼太

Q. 「アクアソーシャルフェス」のイベントでは、どんなことを学びましたか？

A. 私は1年生の頃プロジェクトに参加し、今年で2年目です。昨年までは先輩方のサポート役だったのですが、今回は自分たちが主体になって取り組みました。自分たちの掲げたテーマを、参加される方々に理解していただくにはどうすればいいのか。夜遅くまで会議をすることもあり大変でしたが、1年生の頃とは違う「責任のある立場」に立つことで、精神的に成長できたと実感しています。実際にウミガメが保護されている施設での研修においても、ネットでは知ることのできない「現場」で学ぶことができ、大変貴重な経験ができました。

Q. 現地での活動を振り返って、印象に残っていることは？

A. 今回の取り組みは企業の方と合同で行ったのですが、イベントの計画・進行するための事前準備がいかに大切なのか学ぶことができ

ました。竹垣作りにおいてはメンバーと何度も協議を重ね、腐りにくい時期に竹を収穫し、柱を竹以外の素材にすることで耐久性の強化を図っています。去年も参加いただいた方から「今年の竹垣は、去年の竹垣よりも頑丈だね」と声をかけられた時、初めて自分たちの努力が認められたような気がして、嬉しかったですね。自然環境の改善は、すぐに効果が出るものではありません。今後も活動を続け、ウミガメが安心して産卵できる環境にしていきたいですね。

and more...



田んぼで楽しく悪戦苦闘
日本が誇る稲作文化を体感



ぼに入る。すると、小さな身体が、静かに、ゆっくり、沈んでいく。慌てて小さな手を取ったけれど、なかなか足が抜けず、もう笑うしかない…。あちこちから、はっけよい、残った、残った! という掛け声は響くが、ぬるぬる滑って転ぶのが楽しすぎて相撲にはならない。カッコいいところは見せられなかったけど、日本のお百姓さんが大切に守ってきた稲作文化を、みんなで体感したことを誇りに感じた学生たちであった。

まだまだあります!
大分県内をステージに進行中の
プロジェクトが盛りだくさん。

- NBU is...それぞれの記念日『...』の発展を祈りつつ
- 自然の中で生かされているという実感を得た日
- ありがとうの意味~感謝状をいただき、気づいたこと~ etc...

PICK UP! COCプロジェクト

2017.05.27 「畔づくりのお手伝い」

昨年は、はしゃいでばかりで学生を困らせていた子どもたちが、今年は静かに話を聞いている。「よし、カッコいいところを見せよう!」とばかりに、早速、畔づくりに取り掛かったメンバーだが…。水を含んだ土を寄せる作業って、こんなに重かったっけ? お百姓さんの仕事って、足腰が強くなければできないよなあと感じながら、子どもたちと一緒に四方を土で囲う。畔づくりのお手伝いはなんとか終わったし、ここからは青空の下で解放感を感じながら思い切り楽しもう。「土俵ができたぞ! さあ来い」。今日は泥んこ相撲で足腰を鍛えるぞ。早速、一番乗りの子どもが田ん

くわしくはNBUの
COC特設サイト

coc-nbu.jp



体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

coc-nbu.jp

August 2017 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE



日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

AQUA SOCIAL FES!!

アカウミガメの古里へ。

NBU生ならではの「視点」と「行動力」で、
佐賀関磯崎海岸をアカウミガメの産卵地に。



No. 15



▲ご家族で参加された地域の方と一緒に竹垣を作る学生。竹垣作りを通して、地域の方と交流。

「ウミガメの産卵地を守りたい」 100人が磯崎海岸で心をひとつに。

4回目を迎えた「アクアソーシャルフェス」密着レポート!

株式会社トヨタマーケティングジャパンが全国47都道府県の地方新聞社・NPOなどの活動団体と連携し、全国各地で水辺を守る活動を展開するキャンペーン「アクアソーシャルフェス」。NBU日本文理大学では、大分合同新聞社とNPO法人おおい環境保全フォーラムとともに大分県のイベントを担うべく、2015年から毎年、学生自身が企画立案・運営を行っている。大学生ならではの視点で環境問題に向き合う彼らに密着した。



▲当日の受付・運営も、しっかり学生たち自身で行う。

里山資源の有効活用と 環境保全を目指して。

遡ること3年前。放置竹林の整備に取り組んでいた、人間力育成センターの「四季の森プロジェクト」のメンバーたちは、これまで不要なモノとして扱われてきた伐採した竹の再利用を模索していた。同時期にスタートした海岸の環境保全プロジェクトに参加した学生たちはあるものを発見する。それは海岸の環境を守るために設置されていた「竹垣」。この竹垣を新たにつくることで、里山資源の有効利用が実現し、海岸の環境保全にも役立つのでは…。「四季の森プロジェクト」で、実際に森を訪れて培った環境意識やノウハウを活かし「アクアソーシャルフェス」を企画・運営することを決意した学生たち。「磯崎海岸をアカウミガメの古里にしよう!」を

テーマに掲げたプロジェクトに毎年、取り組んでいる。
4回目を迎える「アクアソーシャルフェス」に向けて、大分合同新聞社の皆さんと打ち合わせを重ねたメンバー。まず彼らが行ったのは、過去3年間の活動の振り返りだった。これまでの先輩たちが作り上げたプログラムをそのまま引き継ぐのではなく、反省点や問題点を解決し、より充実したイベントに発展させたい…。話し合いを続ける中で、2つの大きな課題が浮き彫りになってきた。



▲参加者に理解していただくために…夜遅くまで会議は続く。

メンバーが一丸となり、 課題解決に向けて動く。

まずは、例年、制作している「竹垣」の耐久性について。毎年、フェス当日に竹垣の竹を総入れ替えするものの、一

年間、厳しい環境下に置かれた竹垣の破損箇所は多く、中には柱が折れ、竹垣ごと崩れているものもあったり、早急に耐久性の強化を図ることが求められていた。そこで、佐伯市でウミガメの保護活動に取り組む「NPO法人おおい環境保全フォーラム」が間越海岸に設置している竹垣の視察を実施。耐久性を高めるために必要な知識やスキルを磨いた。また、林業従事者へのヒアリングも行ったところ、気温や湿度、降水量が高い時期に伐採した竹は多くの水分を含み腐敗しやすいことが判明。対応策として、これまでは3月～5月に行っていた竹の伐り出しを12月～2月に変更することが決まった。

2つ目の課題は、参加者が活動の趣旨や目的を理解しないまま、当日の作業に取り組んでいたこと。過去に、一般参加者として参加してくれたNBU生にヒアリングを行った結果、環境保全に対する関心は高



▲事前準備として間伐した竹を竹垣に活用できるよう約1000本の竹をそれぞれ6等分に切り分け、加工。

まったものの「磯崎海岸をアカウミガメの古里にしよう!」というテーマの趣旨をあまり理解できていなかったとの意見が多く寄せられた。そこで協力団体と協議し、今年は、実作業の前に「環境教室」を行うプログラム構成とし、さらにその内容もウミガメに特化したものに変更。実はメンバーのほとんどがウミガメを見たことがないということも分かり、まずは「自分たちがウミガメについての知識を深めよう!」と、実際にアカウミガメが保護されている佐伯市の間越ネイチャーセンターで1泊2日の研修を実施。実際に間越海岸に設置されている竹垣の修復作業を行うなど本番に向けて着々と準備を進めていった。

6月の本番当日までに約1000本の竹を森から伐り出し、更にそれらの竹を6等分に切り分ける。作業は想像以上の労力を要した。「四季の森プロジェクト」のメンバー約20名は、気力を振り絞りながら時間との戦いを続ける…。



▲まずは自分たちが「アカウミガメのこを知る」ために研修を実施。

参加者全員の想いが ひとつの大きな力になる。

新しい竹垣の制作、ビーチクリーニング、環境教室という3つの活動を柱に迎えた、本番当日。時折、小雨がぱらつく、あいにくの天気にも関わらず、学生や地元の方など約100人が磯崎海岸に集結。開会式に続いて行われた、ウミガメに関するミニ講座では、ウミガメの生態や産卵に適した環境について、竹垣を作ることで砂の飛散を防ぎ、ウミガメが産卵しやすい環境を守る松など、生育を助けることなどを参加者に分かりやすく伝えた。

その後、いよいよメンバーのガイドにより、海岸清掃と竹垣作りがスタート。花火の燃えかすやペットボトル、カップ麺の容器を黙々と拾い集める。参加者の一人が哀しそうに呟いた。「漂流ゴミもあるけど、明らかにここに捨てられたものがあるね…」。

7班に分かれての竹垣作りは、木の軸に竹材を互い違いに通す地道な作業。自分たちの作業に集中するだけでなく、参加者にアドバイスを送るメンバーの姿が印象的だった。数時間後。高々と積まれたゴミと完成したば

かりの美しい竹垣の前に「やって良かった!」、「ウミガメが帰ってきてくれるかなあ」といった参加者の声を聞きながら笑顔を見せるメンバー。地域の皆さんとともにウミガメが命を育む古里の海を、いつまでも残したい。学生たちのチャレンジは「進化」しながら未来へと続く。

NEWS

本来の自然を取り戻すために 私たちができること。

環境保全活動を通じて、生態系を保護する取り組みが広がっている。本来の自然の姿を取り戻すために、何をすべきなのか…。学生、企業、地域が一体となった活動に注目が集まる。



※掲載記事は許諾を受けています。
2017.6.25 大分合同新聞(朝刊)

学生たちの活躍は、
NBUのCOC特設サイトをチェック!

nbu coc 検索